

進化論の日本への伝来

— モース以前の人々を中心として —

幸 田 正 孝

(昭和56年4月30日受理)

(一)

『ビーグル号周航記』の著者として知られていたチャールズ・ダーウィン (C. Darwin 1809—82) が、20年余りの歳月をかけた研究を『種の起原』としてロンドンで出版したのは、50歳になった1859年(安政6)11月のことであった。初版1250部は即日売りきれ、翌年1月の再版3000部もまた間もなく売りきれるといふ好評ぶりであり⁽¹⁾、進化論が彼の母国イギリスのみならず欧米の社会に大きな影響を与えた事実は、よく知られた所である。

当時日本では安政の大獄のさなかで、初版が出版される5カ月前から、日米修好通商条約によって自由貿易が始まっていた。彼の進化論は、いつごろどのようなルートを経て入ってきたのか、また、どのように人々から迎えられようとしたのだろうか。

普通、ダーウィンの進化論の紹介は、腕足類を研究するために17日間の船旅をして1877年(明治10)6月に来日し、その後間もなく、当時唯一の大学として開設されたばかりの東京大学の初代動物学教授となったアメリカ人エドワード・S・モー(ル)ス(Edward S. Morse 1838—1925)によってなされたときとされている。それは1877年10月6日、土曜の夜の進化論に関する3回講演の第1講から始まった⁽²⁾。大学の広間に教授数名とその夫人、五百人乃至六百人の学生が集まり、ほとんど全員がノートをとるなかですすめられたこの公開講演が終ると、日本人の教授の一人が彼に「これが日本に於けるダーウィン説或は進化論の、最初の講義だといった」と、彼の日本滞在記(Japan day by day 1917)は伝えている⁽³⁾。

モースは、5ヶ月間の帰国休暇を除いた2年間、1879年(明治12)の夏の終りまで、日本での多忙な日々を送った。

(1) 八杉竜一氏によると、1859年6月に当時まだ有名でなかった女流作家 G. エリオットの『アダム・ビード』がでて、年内に1万6千部がうれているので、非常によく売れた本ではなかった。とはいえ、やはり「科学の本としては成功の売れ行きであった」。『進化論の歴史』岩波書店 1969 p. 143

(2) 太陰暦の採用は、明治5年11月9日に決定し、同年

12月3日を以て、明治6年1月1日となった。(この小論の年月日は、これ以前は太陰暦である。)

改暦には、月極め雇人らの「当十二月之分は、朔日2日右両日の分の月給は不被下」といったことのほかに(実は改暦のねらいの一つだが)、「ヤソの正月を採用されし」と慷慨する者もあり、また「今ぢゃ三十日に月が出る」といった俗謡が、当時の燈火の様子からして当然のことながら広く人々の口にのぼったりした。

では、日曜日が休日かということ、各種まちまちであったので、統一をはかるために、1874年(明治7)3月「諸学校休業、従来一六の日を以てするあり、或は日曜日を以てするあり、自今、官立学校は、都て一週一日、乃ち日曜日に改定」との文部省布達があって、官立学校はすべて日曜日休日制となった。つづいて、1876年(明治9)3月に、「従前一六休日の処、来る四月より、日曜日を以て休暇と定め、土曜日は正午十二時より休暇」との太政官布告がでて、日曜日が官庁全体の休日となった。

(石井研堂『増訂明治事物起源』春陽堂 1926

『明治文化史6』元版 1954 原書房 1979

『新聞が語る明治史』第1分冊 原書房 p. 139, 159)

こうしてようやく一般化しはじめた日曜日に、モースが公開の場で、進化論などの講演を精力的に行うことになる。

なお引用文については、句読点・ふりがな等を適宜につけた。以下同じ。

(3) 石川欣一訳『日本その日その日』2 平凡社 1975 p. 58

(二)

ところで、モースの弟子であり、動物学科のはじめての卒業生であって、1882年にドイツへ留学し、帰国後農学部教授として生物知識の啓蒙普及にもつくした石川千代松(1860—1935)は、『日本その日その日』の和訳本に、昭和4年(1929)、序文をよせている。

「先生は……一般動物学を教えられた計りでなく、又採集の方法、標本の陳列、レーベルの書き方等をも教えられた……ダーウィンの進化論は、今では誰れも知る様、

此時より遙か前の1859年に有名な種原論〔種の起原〕が出てから欧米では盛んに論ぜられて居たが、本邦では当時誰ひとりそれを知らなかったのである。処が茲に面白い事には先生が来朝せられて進化論を我々に教えられた直ぐ前に〔明治9年〕マカーターと云う教師が私共に人身生理学の講義をして居られたが、其講義の終りに我々に向い、此頃英国にダーウィンと云う人があって、人間はサルから来たものだと言ふ様な説を唱えて居るが、実に馬鹿氣た説だから、今後お前達はそんな本を見ても読むな、又、そんな説を聴いても信ぜると云われた(4)。

19世紀の初めいらい、欧米のキリスト教各派の伝道局は、日本布教に強い関心をよせ、入国を企てる宣教師もみられた(5)。しかし、それはほとんど不可能であったので、さしあたり中国での伝道に従事しながら、漢訳文書の日本への搬入をはかったり、日本語などを学びながら時節の到来をまつ人々がいた。(なかには琉球での布教をその第1歩と考へて実行する者もでている(6)。

開国となるや、彼らは早速、神奈川・長崎などの開港場で活動を開始した。しかし、幕府のとった禁教政策に加えて、民衆の間に浸透していたキリシタン=邪宗門というイメージと信仰することは処刑に値するという恐怖感、そのうえキリスト教の教義がもつ異質性(唯一絶対神、原罪と贖罪)といったことのために、キリスト教徒は「妖術師、権力に歯向かう輩、祖国を裏切る者たちと見て憎」まれて(7)、宣教師たちの布教活動は極めて困難であった。居留地に人は少なく、身にせまる危険を幕府から守られ密値の監視をうける状況下において、彼らは布教そのものよりも、一方では医療活動を通じて広く伝道の下地をつくり、幕府・藩をも含めた洋学学習への強い要請にこたえながら青年たちとふれあう機会を求めて各所で洋学塾を開いた(8)。(こうして、慶応1年(1865)に最初のプロテスタントの受洗者をえている(9)。

江戸開城を前にした維新政府は、慶応4年(1868)3月14日五ヶ条の誓文を出し、翌日には禁令五条の一つとして「きりしたん邪宗門」の禁制をかかへて固く守るよう命じた(10)。人々には密告を奨励するかわら、太政官直属で異宗搜索謀者を任命している(11)。こうして幕府から新政府へとひきつがれた禁教政策の下にあった明治5年(1872)3月、横浜の居留地に11名の受洗者を中心にして日本人による初のプロテスタント教会(日本基督公会)が設立された。

さて先に引用した石川千代松の序文(モース先生)にみえる「マカーター」は、聖書は別として、初期のキリスト教文献として著名な『真理易知』(1853)の著者である。

中国で出版された同書は、かつて中国で伝道し開国後すぐにアメリカから神奈川へと来航してきた長老教会宣教師ヘボン(J. C. Hepburn 平文 1815—1911)が、日本人の助力をえて和訳し、1867年(慶応3)に上海で印刷刊行して横浜の彼の施療所で伝道に役立てている(12)。

名医ヘボンと同じペンシルバニア大学で医学を修めたマッカーティ(D. B. Mc Cartee 麦嘉締 1820—1900)は、アメリカ長老教会宣教師として、1844年から中国で伝道していたが、1872年(明治5)ミッションを辞し上海のアメリカ領事館の職をへて、その年の9月から第一学区第一番中学(この年の「学制」によって南校から改称)の英語教師に聘用された(13)。開成学校さらに東京開成学校となつてからは、博物学と医律(生理学・解剖学)、のちにはラテン語などを担当し、1877年(明治10)4月願いによって解雇となっている(14)。

とすると、マッカーティが、ダーウィンの学説を「実に馬鹿氣た説だから、そんな本は読むな、そんな説を信じるな」と、議義のしめくりに学問の大成を期す若者たちを激励した事情をよく理解することができる(15)。

ところで、彼ら宣教師が啓蒙布教にあたって、日本に進化論的な見方が、自生的にせよ伝来によるにせよ、存在していない場合には(16)、ことさら積極的にその非を述べる必要はないのだから、進化論の消極的否定的な紹介をいつごろから行っていたかを確かめることは、——彼らの活動の跡をたずねるのさえ容易でないのだから、困難である。しかし、もし彼らと、人格・学識(科学的知識)・力量において相拮抗しうる人物がいたと仮定しえた場合には、彼(ら)のいう「馬鹿氣た説」に注目し探究することもありえたかもしれない。がともかく、ここに進化論伝来の1つのルートがありえたことは確かだろう。

(4) 前掲書(3)の1 p. 6。〔 〕内は引用者、以下同じ。

なお、石川千代松「日本の動物学に関係ある外国人」

『岩波生物学講座』(昭和6年)に同趣旨のやや詳しい紹介があり、「マカーターという宣教師の先生」とある。

(5) 1837年モリソン号で入国の志を果たそうとしたギュツラフ(Gützlauff 1803—51)は、漂流日本人の協力のもと、和訳の『約翰福音伝』『約翰上中下書』をシンガポールのアメリカーン・ボード印刷所で同年出版している。高谷道男『ヘボン』吉川弘文館 1961

(6) イギリス海軍士官らが創立した海軍琉球伝道会に属する宣教師ベッテルハイム(B. J. Bettelheim 伯徳令 1811—70)は、1846年(弘化3)に那覇へ入り、1853年に琉球にきたペリの通訳をつとめた。1855年(安政2)には香港で琉球訳聖書(『路加福音書』『約翰福音書』など)、'58年には漢訳日本訳対照の『路加福音書』を出版している。なお、『明治文化史6』p.257-9参照。

(7) ニコライ『キリスト教宣教団の観点から見た日本』1869, 中村健之助訳『ニコライの見た幕末日本』講談社1979, p.83-84

(8) 熊本バンドは、熊本藩がアメリカ人ジェーンズ (L. Jones 1838—1909) を招いて明治4年9月1日に開校した熊本洋学校から、1876年(明治9)1月に誕生した。

(9) 開国とともに来日し、1862年に開かれた横浜運上所内の英学所で教えていたアメリカ改革派教会のブラウン (S. R. Brown 1810—80) らは、公使ハリスを介して知った針医・矢野元隆から日本語の手ほどきをうけた。のちに日本基督公会の創立に参画し仮牧師となるバラ (J. H. Ballagh 1832—1920) が矢野に洗礼をさずけた。なお、『明治文化史6』には1864年(元治元)とある。

(10) 「第三札に曰く、きりしたん邪宗門之儀は堅く御制禁たり、若不審なるもの有れば、其筋の役所へ申出べし。御ほふび下さるべき事」(『明治天皇紀』第一 吉川弘文館 1969)。この高札に対して、「条約締結国が尊信しているキリスト教を侮辱するものであり、開国和親にもとるものである」との抗議を外国使節団からうけた新政府は、切支丹と邪宗門の別々であるべき両方を1行に書いた結果だと苦しい弁解を準備しながら、次のように手直した。「……此度別紙の通り被_レ相改_一候条、早々制札調替可_レ有_二揭示_一事

一、切支丹宗門之儀ハ是迄御制禁之通固ク可_レ相守_一事
一、邪宗門之儀ハ固ク禁止候事

慶応四年三月 太政官 』

尾佐竹猛氏は、「閏10月に令しながら、始めの三月の月を用ひしめ」たとのべておられる。「見返し絵 解題」『明治文化全集』19巻 日本評論社。他に『大隈侯十八五年史』第1巻 原書房 p.171~180。イギリス公使パークスの部下サトウの『一外交官の見た明治維新』下(岩波 p.196以下)は、それらの舞台裏も伝える。ニコライ前掲書 p.87-88

(11) 「明治4年のことで、長崎、大阪、東京、横浜、函館など各地の外国人宣教師の動きと日本人信者の状況を探した」『日本歴史の視点4』日本書籍 昭48 p.30 こうしたことは、明治6年の高札撤去後もつづき、たとえば1877年から翌年にかけて、開学まもない同志社英学校に諜者を潜入させている。重久篤太郎『お雇外国人⑤』鹿島研究所出版会 1968 p.196-206 にその探索書がでている。

(12) 重久氏によったが(同上 p.31-32), 「近代日本最初の文献」で1864年(元治元)とある。高谷前掲書(5)によると、横浜で版木を作った年らしい(『明治文化全集』もこの年をあげている)。

1865年(慶応1)にムニクウ編『聖教要理問答』がでて

いる。パリ外国宣教会のジラル (Girard 1821—67) はフランス総領事付通訳官兼領事館付司祭として開国とともに来日し、文久2年12月(1863年2月)横浜居留地に天主堂を建設し一般に公開している。中国をへて1860年に横浜へきたムニクウ (Mounicou 1825—71) が、ジラルの命をうけて、中国四川省の天主教教理問答書を邦文に直訳して秘密出版した。『明治文化全集』元版 第19巻 p.5

(13) 政治と宗教とのつながりもみえるが、当時信頼しうる秀れた人材はえがたくて、公使館に依頼しているケースもあり、彼の場合もそうか。なお翌明治6年に禁教の高札が撤廃されると、「伝教士ヲ学校教師トシテ雇入ルヘカラス」と外国人教師雇入に制限を加えている。しかし、この布達は、宣教師が大半は大学出で、選ばれたり自ら志願して新天地に赴任してきただけあって、態度や性行についても来日する外国人のなかではぬきんできていることが多いようで、彼の場合も、「従前雇置候伝教士ハ条約年限丈ケハ差置」(明治6年7月)方針にもかかわらず契約を更新している。

(14) 『日本科学技術史大系8』第一法規 1964 資料9—3 Aには、明治8年度、9年度の博物学教授マッカーティ(マツカテー)自らの詳細な授業報告がある。東京大学への切りかえは4月12日であり、彼は5月に出国して、上海のアメリカ領事館の職をへて清国政府につかえ、1888(明治21)年には宣教師として再来日した。

(15) 村上陽一郎氏は「生物進化論に対する日本の反応」『日本人と近代科学』新曜社 1980 p.107-108 で、石川千代松から別の部分も引いておられる。「開成学校では、マッカーティといふ先生が居られて、我々に人身生理学といふものの講義をして居られたが、此の先生も、その他当時開成学校の先生達は殆んど皆宣教師で、本当の専門家は一人も居られなかったのである。であったからでもあらうが、之等の先生方は、エボルジョン・セオリーというやうな学説があるということは、^{あいき}憂気にも出されなかったのである(全集第4巻, p.134)」。動物学を専攻しようという石川にとっても(『技術史大系8』資料9-10), まして世間一般にあっても、「ダーウィン」がモース以前にはまず問題にされていなかったことはわかる。村上氏が108頁で「当時の宣教師たちが、ある程度の科学的知識(ダーヴィニズムも含めて)を勉強してきている」とのべられているが、ここではそれ以上とみてよい。また同派のヘボンを見ると、プリンストン大学をへて(1832), ペンシルバニア大学で医学を修め(1836), 中国伝道ののち、ニューヨークで開業した(1846—59) 評判の医者でもあった。日本での活躍はよく知られている。

(15) <なぜ日本で進化論が生まれなかったのか>、<隣国である中国・朝鮮ではどうであったのか>というテーマはかなり魅力的だが、しかし、キリスト教的世界のいたる所で誕生したわけではないので、進化論の誕生をキリスト教との関係を中心に論じてもぬけ落ちる部分がある。(付論参照)

(三)

次に、日本人自身が進化論に言及した例に当たってみる。

「日本の生物学史研究の先達である上野益三博士によれば、1875年(明治8)にてた松森胤保の『求理私言』に生物進化のことがかかれていますということである」と八杉竜一氏は、古い例としてあげておられる(16)。

村上陽一郎氏によると、現在までのところダーウィンの名が邦書に現われた最初は明治7年(1874)で、同年刊行の葵川信近の『北郷談』がそれである。

「理学家又曰く、人は猩猩の化成なりと。アダムとエヴァの孫に非ざるなりと。英の理学家ダービンの説に曰く、世未だ人類の有らざる前に、一種の大獣あり、その大獣化成して各種の獣となり、その化成の毎に、粗者は精者となる。猴類に数種あり。化成して猩猩となり、猩猩自ら化成して遂に人類に為ると。——中略——仏書に、此世界、曾つて幾回も變成し、当初此世界、一度大暴風あり、大海水を吹き、深八万四千由旬云々。而して我邦にても、往々、高山深谷の処に於て、海底のものを見るに、近年の英理学家スミス、その国にありて、今の陸地の、上古には海底たるを発見す。是、仏説の理学に於て協合するものにして、又理学家ダービンの説に、此の地球初めて成るや、その質硬ならず、恰も水母の生の如き時に、葦芽の如きものありて、水母の如き者の之に粘き、以てこの形を為す。此は、是理学の我が古事記の説に協合する者なり(17)。」

元来奈良の神官であったという葵川が——どのようにして、この『種の起原』からかけはなれた「ダーウィン説」を学んだかは不明だが——、「スミス」「ダービン」をひきあいに出して、仏教書や我が古事記の説を持ち上げようとなぜするのだろうか。スミスに大地の不変を否定させ、ダーウィンに人間の創造(アダムとイブ)を否定させる時、葵川の目は両者の交わる「創世記」(キリスト教)に注がれている(18)。

一体、日本の伝統的思想である仏教や神道は、この当時どのような位置に立っていたのだろうか。

公議政体による諸藩連合政權の主班として徳川氏が主導権をにぎろうとする大政奉還路線を阻止するため、薩長の武力倒幕派は、芸州藩をふくめた三藩協定のもとに「死中

活を得」(19)べくクーデターを執行し、慶長3年12月9日(1868.1.3)幕府の廃止と三職の設置を「王政復古の Groß令」で表明し、「諸事神武創業之始ニ原ツ」く新政府の樹立を宣言した。

どのような政治的な変革も、歴史的な制約をうけた社会のなかで行われるのであり、変革が自生的であるほど変革の条件はその社会の中で成熟するのだから、その思想も思想的伝統と深くかかわることなしには生まれ得ることはあるまい。「旧弊一洗」「百事一新」にも、復古と革新の2つの思想的源泉をさぐることができる。しかし、復古思想に幕藩体制の打倒という革新性をどこまで認めることができるかには問題があるが、現状を変えようとする力をもちうることはありえよう。

19世紀なかばに登場した平田派国学は、復古神道をとない政治運動の理論としても開国前後から急速に普及しはじめた。平田鉄胤(1799—1880)、矢野玄道(1823—87)、とくに津和野国学の創始者である大國隆正(1793—1871)とその弟子・玉松操(1810—72)や福羽美静(1831—71)らは、維新に大きな影響を与えた。岩倉具視(1825—1883)の謀臣・玉松によってうち出された建武中興を遠くこえた「神武創業之始」は(20)、維新政府を支える思想的宗教的底流をなし、慶応4年(1868)3月13日には、神祇官を再興して祭政一致の制に復するとの布告となって現われた。

新しい国家の権威づけには、新しい政治理念も必要である。しかし、アジアの19世紀という社会にあっては、古代からの宗教的機能を根底に据え直すことが他の政治的機能にも優越して必要であった。豊饒多産という不可思議で実現困難なだけにさらに一層強まる人々の秘やかで熱い思いを代弁し、マツリゴトを代行してその役割を独占してきた実績に立ち返えることを激動期が可能にした。

江戸開城の交渉がなる翌14日に、五箇条の誓文の誓祭が、天皇の親祭という前例のないスタイルで挙行され(21)28日には神仏判然令が布告された。大隈重信のいう宗教上の「一大革命」であり(22)、そこにはうずまく仏教批判があった。国学者による批判、尊王論大儀名分論からする儒者の批判、幕府藩財政再建の見地からする経世家の論、それらに神職らによる神葬祭の要求からする仏教排撃が加わってきた。こうした動きは、寺請制度などを通して仏教を支配機構のなかへと組みこんだ幕藩体制への不満や批判となり、その体制の動揺を増幅させて維新を実現させる一底流をなしていた(23)。これに加えて、当局者がいざいだいた耶蘇教侵入への危機感も、より一層神道による新体制の整備統一へと自らをかりたてることとなった。そこで明治2年(1869)2月「古にも例なき」宣教師を設け、翌年正月の「大教宣布告」の詔勅のもと、神道国教化・国民教化へのりだすこととなった。

これに呼応して、仏教界に対しては、寺社領の没収、宗門人別や寺請制度の廃止などと、その経済的政治的な保護や特権をことごとく廃^{きしやく}仏^{ぶつ}毀^{くわい}釈^{しやく}のなかで奪^{うば}っていくこととなる。こうしていやおうなしに立て直しをせまられた仏教界では、徳川以来の弊風を一洗し自らの反省をふまえて仏教の本旨に帰ろうとする動きもみられ、キリスト教宣教師の社会的活動におされて盛り上がってくる。キリスト教に対抗して伝統的宗教としての重みを再確認させようとする動きは、開国以来盛んであり、二千余人が供奉する天皇の一行が東京城から京都へと出立する明治1年(1869)12月8日に、京都では諸宗管長の協力の下に諸宗同徳会盟が結成され、翌年3月には「皇国の御為に身命を惜まず」「邪宗防禦^{きよぶ}の為、一同死を期し、尽力致し度」しと連署歎願した。それをうけて東京でも、幕末からキリスト教の排撃を主張し排仏論を論破してきた浄土宗の養鷗^{うかい}徹定(1814—91)が盟主となり、仏教界の重鎮を集めて4月に諸宗会盟を結成している(24)。

ところで、仏教界をきりすて、^{かんながら}「惟神ノ大道ヲ宣布スベ」き宣教師に、知藩事(旧藩主)以下を総動員して、全国各地で人々を「日割ヲ以テ会集セシメ、教典^{しやうてん}ヲ誦読^{じゆんてき}」させるといった様は、信仰心の強要そのものであり、他方では万国対峙の体制をつくりあげるために文明開化を急がなければならないという問題ともからんで前途は暗かった。実は農民一揆が幕末をしのぐ勢いで急増しており、禁教と浦上キリシタン問題に対する諸外国への対応にもせまられて、仏教界との妥協をはかりながら、明治4年(1871)8月神祇官は神祇省へ、さらに翌年3月には同省の廃止・教部省の設置へと手直しをせまられることとなった。いまや全国の神官と僧侶が教導職に任命され、「三条教則」(敬神愛国・天理人道・皇上奉戴朝旨遵守)に基づいて全国民の教化にあたることとなった。排撃しようとした神仏混淆の政治による再現であった。

これに対して、欧州視察中の西本願寺の僧・島地黙雷(1838—1911)らが、宗教と政治を混同する不合理をのべ、「遵朝へ専政ノ体也、立憲ノ風ニ非サル也」と批判し、駐米代理公使森有礼(1847—89)は、ワシントンで“Religious Freedom in Japan”を発表した。信教の自由の問題が論じられ、岩倉使節団が諸外国から強く求められて、ついに明治6年(1873)2月、キリシタン禁止の高札は撤去された。外に向っては信教自由の体裁をよそおい、国内には「高札面ノ儀ハ一般熟知ノ事ニ付」取り除くと弁解をしている(25)。

そして1875年(明治8)になると、真宗四派が大教宣布の中枢機関である大教院を離脱し、5月になるとついに大教院は解散した。

諸宗会盟を発端とする教学振興・英才登用のための教育

制度の刷新と宗門学校設立の動きのなかで、モースが来日した1879年(明治10)、20歳近くの1青年が京都へでて東本願寺の教師教員(英学科)へ入学した。かれ井上^{ただのり}上門(1858/59—1919)は(26)、幕末維新期に蘭法匠石黒忠^{ただのり}忠(1845—1941)の塾で漢籍を学び、長岡洋学校をへて京へでた。が翌年春には東本願寺の給費生となり、秋に東京大学予備門に入学、1881年(明治14)9月から東京大学文学部で学び、85年7月に哲学科をたった1人の卒業生としてでている。そのあとすぐに、当時唯一の宗教新聞に連載し好評をばくした論文をまとめてだしたキリスト教批判書『破邪新論』は、仏教界に大きな反響をよび、さらに『真理金針』をへて『仏教論序論』が、1887年(明治20)に出るにおよんで、おりからの欧化主義への反発も手伝ってキリスト教への攻撃は最高潮に達したという。いま、板倉^{きよのぶ}聖直氏によって『破邪新論』から「耶蘇教の難点にして、けだし今日の学者といえども、その学者中よくこれを証明するものなかるべし」と彼が自負した諸点をあげてみよう。

第1地球中心説、第2人類主長説、第3自由意志説、第4善悪禍福説、第5神力不測説、第6時空終始説、第7心外有神説、第8物外有神説、第9真理標準説、第10教理變遷説、第11東洋無教説、第12人種起源説

神が土から人間を創造し、万物を支配させた(人類主長)、その1対の男女の子孫が世界中に広がった(人種起源)といった考えを、進化論を利用して批判し、地動説やエネルギー不滅の法則などの近代科学の成果とキリスト教とが相反するとのべ、さらに仏教界最初の文学士として「キリスト教は近代哲学にも反する。……西洋の合理主義的な近代哲学にもっともよく適合する宗教は仏教であると主張した」。

近代科学が目ざましい進歩を見せている世紀に、それとの外面的形式的な類似点をさぐりだして仏教を正当化するというやり方は、この時勢にいかにもマッチしたものであるが、しかし、家永三郎氏のいう「真の仏教者としての宗教的な内面的なものを盛りたてて、新しい明治以後の近代社会の中に仏教の新使命を開拓して行こうとすることをしないで、キリスト教に対する日本の伝統的立場、或いは新しい天皇制国家主義の立場からする攻撃の尻馬に乗ることによってその地位を回復しようとする態度」の枠内にとどまったものだろう(27)。

以上、ややのちの時期までも含めて、神官、僧侶らが置かれた状況と、キリスト教ならびに進化論のおかれた状況をみてみた。

では、一体、誰れがいつ頃、ダーウィンのどの著作を翻訳刊行したのだろうか。

訳者は、中村正直(敬宇)の門人でクリスチャンであっ

た神津専三郎。その訳書『人祖論』は、On the Origin of Speciesの第3版(1861)から加わった付録と、The Descent of Man ('71)の第2版('74)から序文と最初の2章をとって、それぞれ完訳した和とじ3冊本で、奥付には「明治十四年六月廿二日版権免許 同七月出版」とある(28)。

(16) 八杉前掲書(1) p.168

松森胤保については、中村清二著『幕末明治の隠れたる科学者 松森胤保』自文堂1947がある。それによると、文政8年(1825)に生まれた松森は「幕末から明治初期を通じて或は一藩〔庄内藩の一支藩〕の重責を荷いながら、政務多端な際にも、兵馬控惚の間にも寸陰を惜みつつ、窮理学、博物学、人類学より利用厚生を目的とする工学の諸部門に亘って熱烈なる実践と研究に終始した人」で「言葉の正しい意味に於て真の科学者である」。

「此は、従来の東洋流の学者が空理・空論に馳せて極めて独断的であったのを非なりとし、西洋からの新渡の科学的研鑽の方法を是なりとして、総ての事物を必ず先づ精査し検討して真実を握らんとした。……例えば博物学に於て、彼は、諸動植物の捕獲・採集は殆んど皆自ら之を行ひ、之を写生したり或は之を飼育栽培して変種を作り出し、又その剝製や腊葉の方法等を研究した……彼は、読者に対して、彼の所説を了解する為に実物に就て説の正否を験するやう、書中の随所に之を要求して居る」。しかし「科学者としての教養をうけたことはなく、又、欧文も読めなかったらしく、専ら訳書によって洋学を修めたのであるが、その何書であったかは明らかでない」。遺著は90余りもあるらしいが「一つとして公刊されたものはない」。(酒田市の光丘文庫に所蔵する分もあるという)。

『求理私言』は、本文9門、追録3門、全体で12門117項目からなる彼の窮理書では最大の著述で本文の終りに明治八年七月十九日洗筆とある。進化にかかわる項目は、第9門雑57 質物・虚物 の、前進する方法による動物の分類であるが「学術的ならず」であり、動植物の分類は「重要な記事でない省略」とある。追録の部分の84~101項目にかけては、鳥・獸・魚・虫・草木などと「博物学に関し筆者の専門外であるから解説はその道の学者に譲る」とあるが、本文ののちの執筆で時期は不明である。上野益三氏『日本博物学史』(平凡社昭48)の年表に「独自の進化学説をのべる」とあるのはどの項目のことか。なお104で人の祖先が西アジアで生まれて世界に広がったという「西説」を常理に戻ると批判している。

『両羽博物図鑑』には、ノアの洪水説を否定し猿類が人間の起原である可能性を認めているとのことであるが、中村氏の著書では「嘉永元年より明治21年に亘る記事」だとしか知りえないので、時期は不明である。

松森は、『東京人類学会雑誌』によると、明治23年庄内で創立された「奥羽人類学」の第2会(明治23年12月)の会合で、名誉会員から会長に就任し、第6会(明治24年4月)には「石器土器につき鄙見を述ぶ」という講演をしている。翌明治25年(1825)没。(享年68歳)

(17) 下出隼吉『明治社会思想研究』からの村上氏による孫引きからとった。(前掲書 p.105-106)

なお「近年の英理学家スミス、その国にありて……」のスミスは、イギリス地質学の父とよばれた W. Smith (1769-1839) のことだと思われる。

(18) 葵川の話は「キリスト教教義研究のために宣教師の話聞いた際に、その中で否定的に語られたダーウィンの説のいわば孫引きであったかも知れない」と村上氏はのべておられる。しかし、否定的に語る必要があったということには疑問があるし、しかもスミス・ダーウィンをひいての論だから、「話を聞いた」程度ではあるまい。もっとも聞き方も色々で、明治五年に日本基督公会が11名の教会員を中心に創設されたとき、うち2名は潜入した本願寺派の僧(1名は島地黙齋の直弟子)であり、明治3年に「受洗」していた1名が執事に就任していた。

(19) 慶応3年12月8日の岩倉宛建言(「大久保利通文書」第二『近代史史料』吉川弘文館 p.45)

(20) 『明治天皇紀』第一 p.560

(21) 『近代日本の争点』(上) 毎日新聞社 昭48 p.167

(22) イギリス公使パークスとの、禁教問題をめぐる論戦で頭角をあらわした大隈は、神祇官御用係をもつとめた。以下『大隈伯昔日譚』第6章宗教問題による。

(23) 「僧侶たり伝導者たるものは、社会民衆の旅行に向って正当の道を指示する嚮導者とはならずして、寧ろ負担の重荷に重荷を加ふる厄介者」(同上書)

(24) 会盟の研究テーマを『明治文化史6』p.190-191によってあげると、王法仏法の不離、邪教の排斥、神儒仏の提携、經典の研究、旧弊の一洗、学校の経営、英才登用、民衆教化の八カ条である。

(25) 尾佐竹前掲書(10)

(26) 板倉聖宣氏「妖怪博士・井上円了と妖怪学の展開(その1)」『仮説実験授業研究11』1977によった。

(27) 家永三郎氏『近代日本の思想家』有信堂1970 p.129 精神的内面的な人間性の探究を通しての再生の可能性は、いわゆる新興宗教の統出が示している所である。

(28) 国会図書館の所蔵本によった。

(付論)

身分制の強さが進化論を生みださなかったといった論じ方もあったようだが、進化論が誕生するためには、観察と実験と多くの分野でのぼう大な知識の集積も必要であっ

た。たとえば、植物や飼育動物の品種の改良とか、新大陸や新しい生物の発見によって環境と生物変異のつながりに気づき、それらを通して形態学や(系統)分類学や生態学などが発達し、さらに古生物学・発生学・比較解剖学などの多くの分野での知識の蓄積と体系化が必要であった。「問題に関係する多くの事例の集積と綿密な考察とをまわって、進化論は誕生」しえた。(渡辺正雄氏『日本人と近代科学』岩波書店 1976, p.108, 傍点引用者)

ところで、この綿密な考察を規定してきたのはどのような条件だったのだろうか。

梅棹忠夫氏は、『日本探険』(中央公論社 1960)で、およそ次のようなことをのべておられる。

ヨーロッパには最初から野生ザルがいなないし〔ジブラルタル地方は例外〕、それにキリスト教の影響もあるので、なおさら、人間と動物の間に断絶がある。「進化論というのは、人間と動物の間の断絶を克服し、動物のなかに秩序を見出したいという努力のあらわれ」だとのべておられる(p. 226-227)。

これをひきながら、筑波常治氏も、ヨーロッパ文明の母胎であるキリスト教的な自然観は、アニミズムの伝統が強い日本の場合とはちがって創造説に見るような人間と動植物の間の断絶があり、「それへのアンチ・テーゼとして進化論が登場した」とのべておられる。(『生物学系科学者の思想』『科学の思想Ⅱ』現代日本思想大系 筑摩書房 1964 p.19)

日本人の歴史意識が丸山真男氏のいう「時間の無限の線的延長のうえに概念される」ものであり(『歴史思想集』日本の思想6 筑摩 1972 p.41)、アニミズムの世界・シンクレティズムの世界であるとしても、どうしてキリスト教的一神教の世界の人々が「断絶を克服したい」と意欲するのだろうか。

一見、反キリスト教的にみえる進化論が、実は基本的にはキリスト教文化圏の所産である理由を、渡辺氏は、このべておられる。

「種の変化」が進化論の中心テーマだが、これが問題とされるには、あらかじめ変らぬものとしての種の概念が確立していなければならず、それが創造説にある種の概念であった。次に、こうした種が時間の経過とともに進化するには、その根底に一定の方向をもった、くり返しのきかない時間概念が必要であり、これは救済史的歴史観に由来するものであった。(前掲書 p.123-124)

神による創造と原罪(追放)と救済ということならば、

あるいは宗教改革後の人々の苦悩ということならば、生物学だけではあるまい。

近代科学の開拓者たち(たとえばデカルトやニュートン)も、しばしばキリスト教の神について語っていて、これが自然現象のなかに普遍的な法則をさぐりだそうとする彼らの確信を支えてきた。全能なる唯一の神によって創造された自然は、合理的普遍的な秩序に従っており、たとえ、それを直ちには知りえないとしても、(特別に創造された)人は、等しくその法則(神の栄光)をみることができるはずである。そう考えることができること自体、すでにその可能性の証しであり、私の論拠とは、「神の無限の完全さ」なのだ、と。また、たとえば、リンネをかりたてたのも、「神が創造した種をかぞえあげ、配列したい」という願いであった。

しかし、ではキリスト教的世界では古代の学問の遺産がうけつがれ、学問はストレートに発達してきたのだろうか。

科学の開拓者たちが、自然の法則を人は等しくつかむことができると考えたこと自身に、時代性が刻印されており、科学の時代性(たとえば『種の起原』にこだましているイギリス農業技術の発達とか、マルサスを通しての経済大恐慌とか)を浮びあがらせてくる。17世紀のロンドンでは、ホップズが「人生は不潔で野蛮だ」とのべるにふさわしくまだ汚物にみちみちていたのだから。

あまりキリスト教にとらわれつづけると、キリスト教的世界以外では、近代科学をうけいれ推進することはできないのではないかと、といったことにもなる。(キリスト教的ではなく、イスラム教的一神教の世界ではどうであったのだろうか?)

コペルニクスとかガリレオといった先駆者が、人類の歴史的な幼年期である古代ギリシヤへとさかのぼった事情をも十分注目しておかねばなるまい。

欧米の科学を摂取できるのか、はたして東洋人は、それに独創的な研究業績をつけ加えることができるのかという長岡半太郎の悩みは(板倉聖宣氏『長岡半太郎』朝日新聞社 昭51, p.39以下)、すでに彼自身によって(あるいは日本の現実によって)解答が出されているとみてまずさしつかえあるまい。それが「公害の先進国」という形であろうとも。

終りに、資料面で国立国会図書館ならびに津山基督教図書館にお世話になった。記して感謝いたします。